

立正大学博物館 館報

万吉だより

MA GECHI NEWS

第 19 号 平成 26(2014) 年 10 月

立正の伝統

館長 池上 悟

平成 26 年の本年は、文学部創設 90 周年にあたる。大正 13 年の大学令に基づいて従来の日蓮宗大学から立正大学に名称を改め、文学部に宗教学科、哲学科、史学科、社会学科、文学科を設置して学問内容を拡充したものであった。今に連なる伝統の起点となるものであり、旧制大学の伝統を堅持するものでもある。

さらに本年は、昭和 56 年に熊谷校地に開設された法学部の品川校地移転が開始された。これは 8 学部 15 学科の総合大学となった立正大学が、品川校地を主体とする展開を意図したあらわれでもある。

立正大学博物館では、立正大学史において節目となる平成 26 年を記念して、「立正大学のあゆみⅡ」の企画展を、7・8月に品川校地、10・11月に熊谷校地で開催した。

立正大学の始原は文学部にあり、大学の基本は仏教学部にある。昭和 25 年に経済学部、昭和 42 年に経営学部、昭和 56 年に熊谷校地に法学部、平成 8 年に熊谷校地に短期大学部から発展させた社会福祉学部、平成 10 年には熊谷校地に文学部地理学科の移設を伴って地球環境科学部、立正大学開校 130 周年にあたる平成 14 年には品川校地に心理学部を開設して、現在の陣容となった。それぞれ時代の要請に従って学部を開設して、社会に有用な卒業生を送り出してきた。いまや立正大学の卒業生数は 10 万人を越え、大きく社会に存在を誇示している。

しかしながら、品川と熊谷の校地別の 4 年一貫教育体制となり、立正大学としてのまとまりに欠ける傾向もまた見受けられるところである。2 校地、8 学部と所属は異なるとはいえ、すべてが橘の校章のもとに額に汗する学生であり、立正の名の下に統轄される存在である。学生諸君には、天正 8・1580 年以來の関東最古の学問の伝統を踏まえ、誇りをもって社会に巣立っていくことを期待するものである。

さらに日々の教育に立正の伝統を踏まえた内容を反映することも、立正の存在を世間に喧伝するためには必要なことであろう。

立正大学 150 年をめざした発展のために、大学一体となった取り組みが進められることを期待したい。

縄文時代のクルミ核破碎用石器の一類型

文学部特任教授 久保田 正寿

縄文時代の遺跡から出土するクルミ核は、オニグルミで占められ、そのほとんどが人為的に破碎されていることが知られています。これには石器が用いられたと考えられますが、学史を紐解いてみると、凹石が最も有力な石器ということになります。しかし、凹石はその定義が明確ではないうえに諸説がさまざまです。その一つに、クルミ核を含めた堅果類を処理した石器として広義に捉えられている程度で、推察の域を出るものではなく、検証もされていないのが現状です。

破碎されたクルミ核の両端には、打痕が観察されます。このことから、クルミの「生り口」または「先端」のいずれか一方を台石に当て、その長軸を垂直に維持した後に、上部を石製ハンマーで敲いたことが明らかです。あえて容易に推察できる手法を記述した理由には次のような重要な視点を指摘できるからです。一つはクルミ核の破碎作業を台石とハンマーとのセットで捉えることの必要性。二つは、一步踏み込んで、クルミ核の両端の形状の違いから、ハンマーと台石の側には異なった使用痕、すなわち二種類の凹石が発生するということです。

以上の視点からクルミ核の破碎に用いられたと思われる石器を取り上げてみました。資料は、熊谷市内の千代遺跡群から発見された縄文時代中期後半の時期に該当することから、今からおよそ4000年ないし4500年前のもので、左の石器は、その重量(3000g)からもハンマーにはなり得ないもので台石と考えるのが妥当です。いわゆる多凹石、多孔石、蜂巢石などと呼ばれる代表的な凹石の一種です。石面には直径が2.5cm前後、深さ1.5cm前後で、逆円錐形に類似する凹みが二か所に認められます。「類似する」とした理由は、凹みの内部側縁部が直線ではなく、わずかに内・外側に張り出すこと。本例のように閃緑岩等の、粒子の整った石材では、その先端部にわずか

に深く凹むアクセントが見られ、全体として、きれいな逆円錐ではないからです。すでに発表したところですが〔註1〕、重要な点はこの形状が、クルミ核の先端部がコピーされたものであることと、軟質の石材が用いられた同種の凹みには、クルミ核の合わせ目にあたる縫合線の圧痕が観察できることです。すなわち、この種の凹みがクルミ核破碎のための台石であったことを検証する重要な痕跡であるとともに、回転運動の結果ではないことの傍証にもなります。

次に、右側のハンマーの役目をもつ石器(545g)に触れます。前述したように、台石にクルミ核の「先端」が接している場合は、「生り口」を敲くこととなります。「生り口」の形状は、平坦かやや張り出す程度ですから、ハンマーにはこの形状がコピーされるため、皿状またはなだらかな凹みが発生痕として発生することとなります。石器の正面中央の上下に外れた位置にこの状況を良く留めています。ハンマーの石材については、写真のように自然石から選択するか、または磨石という製粉に用いる石器を転用することがあります。共通する点は、使い勝手、握りやすさが重視されています。

以上のように、クルミ核破碎用石器の一類型として、台石とハンマーにそれぞれ異なった形状の凹みをもった石器がセットをなすことを紹介しました。この研究成果に基づき、博物館において凹石の展示をデザインすることで、見る側がその機能や使用方法を、容易に思い描くことが可能になるとわれ、石器の理解を深められるのではないのでしょうか。

註1：平成25年6月23日立正大学史学会大会発表「凹石の実験考古学的研究」



凹石の一類型 (左・台石、右・ハンマー)

NEWS ①

展 示

平成 26 年 4 月より、品川キャンパス 9 号館エントランスに展示スペースを設置しました。

4 月から 5 月末にかけては、開設を記念し、パネル展「立正大学博物館への招待」と題して、立正大学博物館の展示や活動について紹介しました。6 月から 9 月末にかけては、第 9 回企画展「立正大学のあゆみⅡ」の移動展示を行いました。10 月からは「立正大学が発掘した古代窯跡」をテーマに、実物の資料をまじえ、立正大学考古学研究室の「古代窯業の考古学的研究」の成果を紹介しています。

今後も館蔵資料の紹介や、企画展・特別展の移動展示を行っていく予定です。品川キャンパスにお越しの際は、ぜひ足を運んで下さい。



【パネル展】立正大学博物館への招待・ポスター



【品川キャンパス展示】立正大学が発掘した古代窯跡・ポスター

資料活用

平成 26 年 4 月 1 日から平成 26 年 9 月 30 日までの期間に、当館所蔵の資料を以下の機関に貸出を行いました。

◆八坂前窯跡 写真 2 点

貸出機関：国分寺市教育委員会

利用目的：①『見学ガイド 武蔵国分寺のはなし』（改訂二版増補版）再掲載

②武蔵国分寺資料館特別展示（後期）『～国分寺市の今昔～』展示パネル及び図録に掲載

◆井草式土器 土器片 47 点

貸出機関：杉並区郷土博物館

貸出期間：平成 26 年 7 月 5 日（土）

～平成 26 年 10 月 31 日（金）予定

利用目的：企画展示「古代の環境—遺跡が語る暮らしと自然」での展示及び図録掲載



【パネル展】立正大学博物館への招待・展示の様子



品川キャンパス 9 号館エントランスにて展示中

収蔵資料紹介①

立正大学博物館所蔵の埴輪について (1)

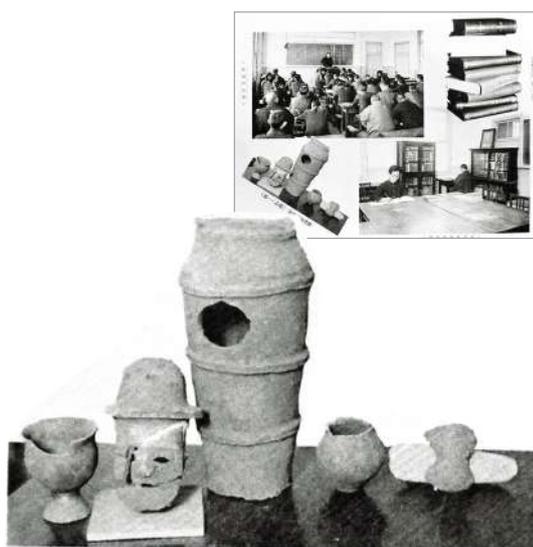
大学院博士課程 足立佳代

はじめに

立正大学博物館には 4 点の埴輪が所蔵されています。円筒埴輪 2 点、朝顔形埴輪、人物埴輪各 1 点です。今回は、これら 4 点の埴輪のうち朝顔形埴輪を紹介します。

この朝顔形埴輪は、昭和 28(1953) 年立正大学発行の絵はがきにその写真が掲載され(第 1 図)、当時歴史参考品室に所蔵されていたことが知られています。しかしながら、その所蔵の経緯についての詳細は記録がなく、寄贈者や出土地は詳らかではありません。埴輪の外面に記された註記も「不明」とあるのみです。

元立正大学博物館館長であり、立正大学における考古学研究の礎を築かれた坂誥秀一先生によれば、「この埴輪と一緒に寄贈された円筒埴輪は、森本六爾が昭和元年に発掘調査した東京都大田区久ヶ原の埴輪工房生産址⁽¹⁾の近くから出土したとの伝承がある。久保常晴先生の寄贈資料に当時の日誌⁽²⁾があり、そこに記載があるかもしれない。」とのことでした。



(部一ノ品備) 室品考参史歴

第 1 図 絵はがきに掲載された埴輪

埴輪の観察

本資料は円筒形の埴輪ですが、残存する一番上の突帯部に向かってすぼまっていることから、朝顔形埴輪と思われます。口縁部以外はほぼ完形で、体部は 3 条 4 段の構成です。

埴輪の大きさは、高さ 43.8 cm 以上、底径 14.0 ~ 14.8 cm、最大径 21.4 cm です。厚さは 11.0 ~ 14.0 mm 程度と全体に薄い造りになっています。器形は上にいくにしたがってやや広がり、3 条目の突帯部分で直径が最大となります。その上は 4 条目の突帯に向かってすぼまり、4 条目の突帯での直径は 16 cm です。突帯の上辺での間隔は 4 段目を除き約 12cm とほぼ等間隔です。

外面は、一次調整のタテハケ後に突帯を貼付け、突帯とその上下をなでつけていますが、肩部のみは突帯貼付け後にもタテハケを施していません。タテハケによって表面の粘土の下部がハケメ単位で弧を描き、フリルのようにみえます。

内面は、斜め方向のハケ調整の後、タテハケによる調整をしていますが、ハケメは密ではなく、ハケメの間にナデの痕もみられ、特に下方はあまりハケメがありません。粘土紐を積上げた痕は上から下にナデながら消していますが、残っている部分もあります。胴部と肩部の接合部分は指で押さえた跡が明瞭で、肩部はナデと指押さえによる調整で、ハケメはみられません。4 段目突帯部分は斜め方向のハケメの後にヨコナデによる調整を施しています。肩部と口縁の接合部(4 段目突帯の下部)は、接合痕が明瞭に残っています。

突帯の断面は M 字状の台形で、しっかりしています。2 条目と 3 条目の突帯間に円形の透孔が 2 孔対であけられ、透孔は横方向の直径約 8.8 cm、縦方向の直径 7.6 cm で、1 孔の透孔の右側に線刻がみられます。線刻は「U」字状の線に 2 本の横線が重なっています。

底部には、粘土板の接合痕が一カ所みられます。接合痕に対面する部分の底部が欠損し、接合痕は確認できませんが、おそらく 2 枚の粘土板を接合し、基部としたものと思われます。底部調整はなく、底部には棒状の圧痕がみられます。

焼成は大変良く、焼き上がりは堅緻で、色調は全体にややくすんだ明褐色です。黒斑はみられず、窯窯による焼成と思われます。胎土は密ですが、経3～10mmほどの小石が混入しています。

まとめ

ここに紹介した朝顔形埴輪は、窯窯焼成であること、胴部の外面がタテハケの一次調整のみであることなどから、川西宏幸氏による円筒埴輪編年Ⅴ期⁽³⁾にあたり、5世紀後葉以降に製作されたものと考えられます。ただし、器肉が薄く、しっかりとした造りであること、突帯がほぼ等間隔であること、肩部には二次調整が施されていること、外面に線刻がみられることなどから、6世紀前半代におさまるものと思われます。

埴輪についての伝承からは、久ヶ原周辺あるいは東京西部地域の古墳から出土した可能性が高いものと考えられます。周辺地域の埴輪と比較検討すると、日吉矢上古墳の朝顔形埴輪の特徴と共通する点がみられます⁽⁴⁾。

日吉矢上古墳は、多摩川右岸、横浜市港北区にあった直径25mの円墳で、昭和11(1936)年に慶應大学校地整備によって発見され、柴田常恵らによって発掘調査されています⁽⁵⁾。埋葬施設の粘土床には^{だりゅうきょう}龍鏡、各種玉類、鉄剣、竹櫛などが副葬され、墳丘からは円筒埴輪が出土しています。

古墳は残っていませんが、多摩川流域の中期古墳として貴重な資料です。

その後、横浜市歴史博物館に寄贈された朝顔形埴輪が註(4)に掲載されている資料です⁽⁶⁾。今後、日吉矢上古墳の埴輪の調査により、本資料との比較検討を報告する予定です。

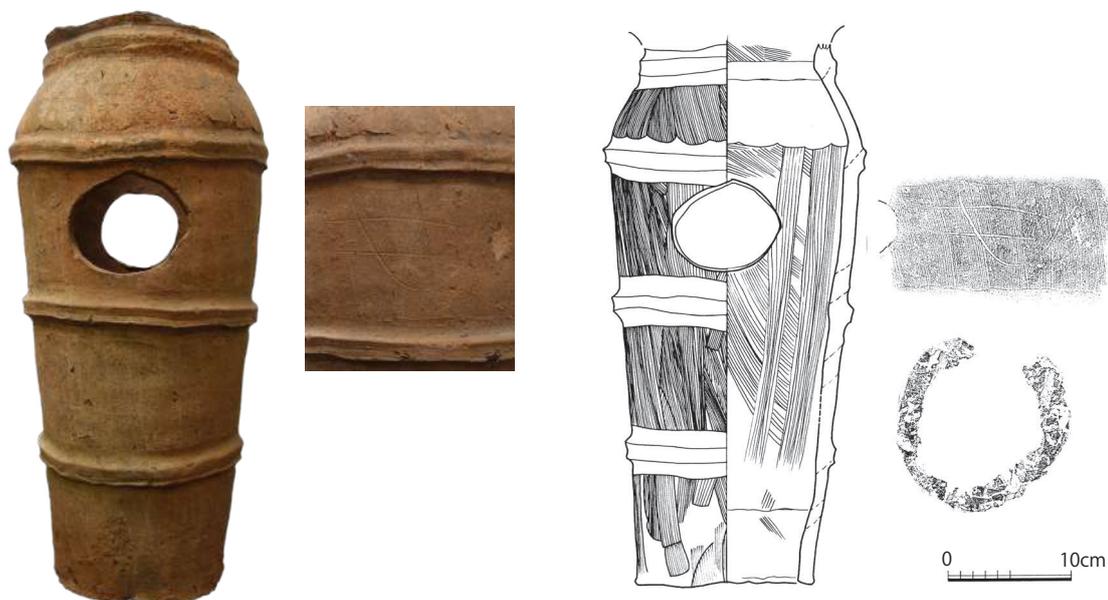
資料紹介にあたり、坂詰秀一先生、池上悟先生、寺田良喜氏、山田俊輔氏にご教示いただきました。記して感謝いたします。

【註・引用文献】

- (1) 東京都大田区の下沼部埴輪製造地と思われる。
森本六爾「埴輪製作所址及窯跡」『考古学』第1巻第4号
昭和5(1930)年
- (2) 現在資料調査中です。
- (3) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
昭和53(1978)年
- (4) 横浜市歴史博物館『横浜市歴史博物館企画展 古墳時代の生活革命－5世紀後半 矢崎山遺跡－』平成22(2010)年
30頁掲載資料
- (5) 保坂三郎・柴田常恵『日吉矢上古墳』昭和18(1933)年
- (6) 横浜市歴史博物館の柳沼千枝氏にご教示頂きました。

【参考文献】

- 第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会『第52回 埋蔵文化財研究集会 埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』平成15(2003)年



第2図 朝顔形埴輪実測図(S=1/5)

収蔵資料紹介② 近世大名家の墓誌

博物館収蔵資料のなかから、越智松平家斉厚（上野館林藩3代・石見浜田藩初代）夫人の石製墓誌を紹介します。

墓誌は、銅板、石、磚などに、死者の姓名、経歴、没年などを記して墓に埋めたもので、棺や骨蔵器に直接記した例もあります。石田肇氏、谷川章雄氏による集成によれば、近世の墓誌は、将軍家、大名家、旗本家、儒家などの墓にみられ、形式もさまざまであることがわかります。

本資料は東京都荒川区に所在する谷中善性寺において発掘されたものです。

善性寺は長享元（1487）年に開創された日蓮宗寺院です。寛文4（1664）年に6代将軍徳川家宣の生母長昌院が葬られて以来、徳川家所縁の寺となり、家宣の弟にあたる越智松平家初代清武をはじめ、歴代当主や正室・子女などの広大な墓所が営まれました。越智松平家は上野館林藩、陸奥棚倉藩、石見浜田藩を領した親藩でした。昭和35（1960）年の区画整理により、墓域が改修され、43の霊が合祀墓に改葬されました。その際、多数の墓誌が発見されており、本資料もそのうちの1つです。

墓地改修時の調査では、木棺が確認されており、石田茂作博士監修の『新版仏教考古学講座7』（昭和50年）に写真が掲載されています。本資料は、調査に携わった坂詰元博物館長が譲り受けられ、本館の所蔵となったものです。

この墓誌は安山岩製で、凸・凹状の2石を重ね合わせ蓋形式のものです。便宜上、凸の方を身、凹の方を蓋とします。身は縦61cm、横44cm、厚さ10.9cmで、内面の凸部に右ページに示した銘文を刻んでいます。

蓋は、下3分の1を欠損していますが、横が44cm、厚さ8cm、縦は身と同じ61cmであったと思われます。蓋の外面上部には「上」と、墓誌の上下を示す刻字が認められます。内面の凹部には「夫人松浦氏之〔墓〕／此下に柩有りあわれみ

〔て〕／ほる事なかれ」と刻まれています。石田肇氏によれば、この「此下に柩有りあわれみてほる事なかれ」は、墓誌の定型句となっており、この句が刻まれた墓誌が多数確認されています。

本資料の被葬者については、蓋の銘文より松浦氏の出自であることがわかります。身には家臣の竹腰長義の撰文により、詳しい経歴が刻まれています。それによれば、夫人の諱は京といい、源清公（松浦静山、肥前国平戸藩第9代藩主）の第4子として、側室の鎌奥氏との間に天明7（1787）年2月12日に平戸城で生まれ、石見浜田藩主松平斉厚の正室となったが、斉厚との間に子はなく、上総介斉良（11代将軍徳川家斉の二十男）を養子とし、天保8（1837）年に病に罹り、医療の甲斐無く51歳で卒し、谷中善性寺の一族の墓域に葬られたことがわかります。

改修された現在の善性寺松平家墓所には、初代清武の墓と合祀墓が残されています。注目されるのは、合祀墓の周囲に区画整理の際に発掘された完形の墓誌11基（身8基、蓋3基）が現存していることです。これ以外にも、数基分の破片が合祀墓の敷石として転用されています。このことから、より多くの墓誌が埋められていたことが想像できます。

詳しくは、今年度の特別展で紹介いたします。ご期待下さい。

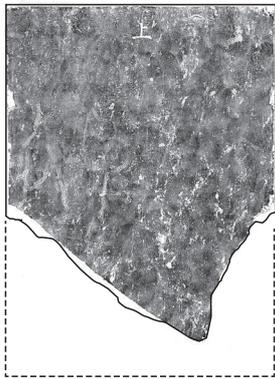
【参考文献】

- 石田 肇「江戸時代の墓誌」（『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編 第56号 平成19年）
- 谷川章雄「江戸の墓誌の変遷」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第169集 平成23年）
- 秋元茂陽『江戸大名墓総覧』（金融界社 平成10年）
- 石田茂作監修『新版仏教考古学講座』7墳墓（雄山閣 昭和50年）



善性寺松平家墓所 木棺出土状況
（『新版仏教考古学講座』7墳墓より転載）

蓋断面



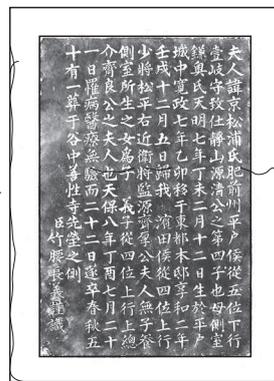
蓋外面



蓋内面



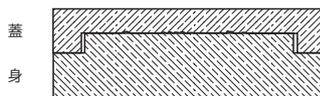
身外面



身内面



身断面



蓋と身を組み合わせさせた状態の断面



夫人諱京松浦氏肥前州平戸侯從五位下行
壹岐守致仕靜山源清公之第四子也母側室
鎌奥氏天明七年丁未二月十二日生於平戸
城中寛政七年乙卯移于東都本邸享和二年
壬戌十二月五日歸我 濱田侯從四位上行
少將松平右近衛將監源齋厚公夫人無子養
側室所生之女爲子 義子從四位上行上總
介齋良公之夫人也天保八年丁酉七月二十
一日罹病醫療無驗而二十二日遂卒春秋五
十有一葬于谷中善性寺先塋之側

臣竹腰長義謹識

身内側 銘文



松平家合祀墓 (善性寺)

NEWS ②

出版物

平成 26 年 2 月 1 日から平成 26 年 9 月 30 日までの期間に、当館では以下の出版物を刊行しました。

- ・万吉だより 第 18 号 (平成 26 年 3 月 25 日)
- ・立正大学博物館案内 (平成 26 年度版)
- ・立正大学博物館年報 12 (平成 26 年 4 月 30 日)
- ・第 9 回企画展『立正大学のあゆみⅡ』図録 (平成 26 年 7 月 1 日)

平成 26 年度から
博物館案内が新しくなりました



利用案内

所在地：〒 360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL 048 - 536 - 6150
FAX 048 - 536 - 6170

開館日：月・水・木・金・土曜日 (大学休業中を除く)

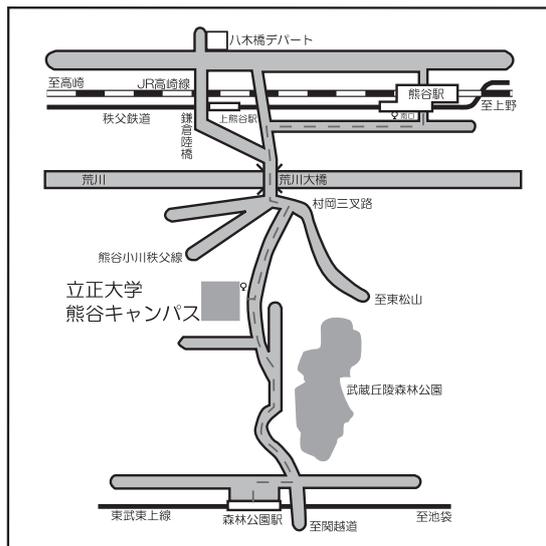
開館時間： 10:00 ~ 16:00

※休館日 (火・日・祝日) 及び大学休業中 (夏・冬・春期休暇等)

交通機関：

- ① JR 高崎線、上越・長野線幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス (国際十王交通) で約 10 分。
- ② 東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス (国際十王交通) で約 12 分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課
(048-536-6010) にご連絡下さい。



あとがき

今年度は 3 年ぶりの企画展を開催することができました。また、品川キャンパス 9 号館に当館の展示スペースをいただき、新たな博物館活動がスタートしました。限られたスペースではありますが、試行錯誤しつつ、当館の活動をより広く知っていただけるよう、活用していきたいと思えます。1 月末からは本号で紹介した墓誌の初公開となる、特別展「近世墓石と墓誌を探る」を開催いたします。今後とも、当館へのご支援を宜しくお願い申し上げます。(池田)

立正大学博物館館報 万吉だより 第 19 号
平成 26 (2014) 年 9 月 30 日発行
編集・発行 立正大学博物館
〒 360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL 048 - 536 - 6150
FAX 048 - 536 - 6170
E-mail : museum@ris.ac.jp
URL : http://www.ris.ac.jp/museum/index

題字揮毫 田淵 観 斎 (立正大学名誉教授)

(印刷：アサヒコミュニケーションズ)